
嬉しい季節

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嬉しい季節

【コード】

N1617B

【作者名】

蒼

【あらすじ】

寒い朝の一場面です。一応幼馴染みという設定で。

『うう さむっ。』

私は小さい声で呟いた。

今は朝の七時半。まだまだ寒い時間。私は吹奏楽の朝練のため学校に向かっている。
それにしても寒い。

『さーむーいー。』

私はまた呟く。

手袋・マフラーをちゃんとつけてカイロまで持っているというのにまだ寒い。

私が唸りながら歩いていたら

ポンッ

頭に手が

『キャッ!』

メチャクチャ驚いた。

だってこんな時間に頭に手を乗せられるなんてほとんどないから。
私はそーっと後ろを向いた。

『何驚いてんだよ。』

そこには幼馴染みのあいつがいた。

『いきなり何すんのよ!』 『いやーなんかさあちっせーダルマがいるなーって思ってたさ。』

あいつは笑いながら言った。

『あんたの方がダルマみたいじゃん!』

私も言い返す。

あいつ・谷原真タニハラマコトは重そうなダツフルコートを着ている。

『いーんだよ。俺は。寒いから。』

真はそう言った。

この時期になると決まってあったかそうなというか重そうなダツフルコートを着てくる。

私が『もつと軽くてあったかいの着れば?』と言っても『これが一番ポケットが大きいから』とか変な答えを返してくるし。

『ねえねえ。』

『ん?』

『もつと良いコート買ったら?』

『余計なお世話。』

『だってこれ重そうだよ。』

私は毎年のように言ってることを言う。

『俺は好きでこれ着てんの。』

真はそう言葉を返す。

そして手をつきだしてきた。

『?どうしたの。』

『手。』

『手がどうかしたの?』

私は良くわからなくて聞く。

『だから、お前の左手よこせて。』
『ん?』

私はまだ良くわからないまま真の手に左手を乗せる。すると真は私の手を握って自分のポケットに入れた。

『何してんの。』

『お前冷え症だからなー、この方があったかいだろ?』

真は笑って言った。

『うん。』

私は頷いた。私は真が好きだ。だからもの凄くドキドキする。

なんだか心まであったかくなってきた今日この頃。

ちなみに、この二人は両思いなのだけど、それに気付くのはのもうちよっと先の話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1617b/>

嬉しい季節

2010年12月13日20時38分発行